



平成29年1月10日

佛教大学附属幼稚園

新年あけまして おめでとうございます。

園長 藤堂俊英

### 「声は手となる」

7歳年下の妹がまだ幼稚園に通っていた頃、たまに父が昔話を聞かせながら妹を寝かせていました。初めのうちは筋書き通りに話しているのですが、先に親の方が眠くなってしまい、中断が入るたびに妹の「それから？それから？」という催促の声が聞えました。その時分には語り手が何を話していたのか分からなくなっていて、「舌切り雀」と「花咲いさん」を混ぜ合わせたような訳の分からない物語に、傍で聞いていた年上の私たち兄弟は「またか」と笑ってしまったものでした。

ご存知かもしれませんが、落語に「桃太郎」というのがあります。話はおとつあんがせがれに「桃太郎」を聞かせて寝かせようとするところから始まります。せがれは初めのうちは耳を傾けているのですが、物語が展開するにつれて質問を連発し、おとつあんに困らせます。とうとう「お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に」というのは、父母の恩は山よりも高く、海よりも深いという意味なんだよと、せがれが解説を始めます。そして続けて「犬・猿・雉をお供に連れて鬼退治に出かけ、宝を持って帰るというのは、忠義・智慧・勇気を元手に世間の鬼の中に分け入り、信用という宝物を持って帰るとい教訓的なお話なんだよ」と親に語って聞かせます。ここまで聞くうちにおとつあんはグウグウ……。 「やあ親なんて罪のないものだなあ」というオチでこの落語は終わります。

次にあげるのは小学校の校長先生もされた鍋島幹夫さんの「おはなし」という詩です。

ちいさいころ ねむるまえに  
おばあさんが よく おはなしをしてくれた  
おばあさんの おはなしは  
いつも おなじだった  
ぼくは ぜんぶ しっていた  
それでも なんども なんども  
おはなしを ねだった  
しわがれた おばあさんのこえは  
ぼくのからだを  
やさしく なでてくれた  
おばあさんのこえには てがある  
ぼくは そうおもっていた

(『さようなら はじめまして』より)

小さい頃、電灯の消えた寝床の中で、祖父母や両親から昔話を聞いたかすかな記憶があります。視覚が途絶えた暗闇では聴覚が冴えわたるのでしょうか、話に引き込まれて行きます。そんな中で聞く話は想像力を掻き立て、心には足跡のような言葉の航跡が残ります。そこにはこの詩のように手をつないでもらったような、つながる感触がありました。どうか語り掛ける声を通して、確かに温かくつながる感触を子どもたちに伝えてあげてください。